

# 朴花城の東京留学時代

山田佳子

Park Hwa Sung's school days in Tokyo

Yamada, Yoshiko

## はじめに

朴花城（1903～1988）は全羅南道木浦に生まれ、貞明女学校を卒業したのち上京し、淑明女子高等普通学校を出た15歳で普通学校の教師となった。そして7年ほどの教師生活を経て、1926年に日本女子大学英文文学部に入学した。作家としては1925年1月、李光洙の推薦によって『朝鮮文壇』に「秋夕前夜」を発表して登壇を果たしていたが、本格的に作家活動を始めるのは帰国後の1932年からである。したがってその間に経験した留学、結婚、出産などが作家活動に少なからぬ影響を与えたことは想像に難くない。

日本の植民地期に書かれた朴花城の作品は、一様に社会に対する強い批判意識が表現され、同伴者作家と見られてもいた。そうした作品の傾向については、活動家だった兄の影響、東京で参加した読書会での経験によることがこれまでも指摘されてきた。しかし東京留学中の経験については特に自伝や随筆などから類推するにとどまり、実証的な研究は行われていない。そこで本稿では朴花城の作品に描かれた留學生活の様子を細かく追うとともに、関連する資料を参考にその周辺の事実を探り、朴花城の東京での体験をより具体的に把握することを目指す<sup>1</sup>。

## 1 自伝と随筆に書かれた朴花城の東京留学時代

朴花城は作品の中に自らの体験をストーリーの背景、あるいはエピソードとしてしばしば用いている。それが朴花城の体験であることがわかるのは、自伝や随筆が比較的詳細に過去の様子を伝えているからである。『吹雪の運河』（『女苑』1963年4月～1964年6月）は自伝として一人称で書かれた長編であり、誕生時から執筆当時までを時間にしたがって追っている。自伝として書かれたものはこの作品のみである。随筆は数多くあるが、『私の交友録』（『東亜日報』1981年1月5日～2月28日）は女学校時代からの出来事を小題毎にほぼ時間順に記録したもので、自伝に匹敵する。自伝が真実のみを伝えているかどうかという問題はいつでもつきまとうが、『吹雪の運河』と『私の交友録』に取り上げられている内容はおおむね一致し、これまでに確認された事実とも矛盾しない。したがってこれらに書かれた内容を朴花城の体験とみなすことに問題はないと思われる。本章では両者を整理して東京留学前後の朴花城の体験についてまとめる。

### 1 日本女子大学英文文学部入学

#### （1）東京へ出発

1925年に登壇を果たした朴花城は教師を辞め、母校である淑明女子高等普通学校4年に再入学

する。学制が変わって4年制となった同校の卒業資格を得るためであった。そして1926年3月に首席で卒業し、3月25日に東京へ向けて京城駅(ソウル駅)を出発する。しかし不安を抱えての旅立ちであった。早稲田大学を卒業して帰国し、朴花城の学費を出してくれるはずだった兄が同盟ストを煽動した疑いで検挙されたことを、3月23日の卒業式の朝に知らされたからである。それでも朴花城は試験だけは受けてみようと淑明の先生から学校のお金50円を借り、友人の父からは10円の餞別を受けて東京へ向かう。東京までの汽車賃は13円と記されている。

東京駅に着いた朴花城は兄の友人で、身元保証人を引き受けてくれた清家敏住氏の夫人、「としこ」と、朴花城の友人が前もって電報を打って知らせてあった二人の朝鮮人留学生の出迎えを受ける。そして入学試験までの間滞在することになっていた清家夫妻の家へ向かう。それから毎日清家氏の案内で、淑明の英語の先生が紹介状を書いてくれた、その先生の恩師の家に英語の指導を受けに通う。

## (2) 入学試験

入学試験は4日ないし5日間行われた。入学試験についての朴花城の記述は詳細である。自伝と随筆で若干の違いがあるが、総合すると1日目は英文和訳が午前と午後2時間ずつ、2日目は和文英訳がやはり午前と午後2時間ずつ、3日目は書き取り、4日目は会話が午前と午後1回ずつ、さらに口頭試験と論文があった。この口頭試験と論文というのは、予め提出してある校訓の「真善美」についての小論文をもとに行なわれた面接のようである。これは5日目に行なわれたようにも読める。

朴花城は梨花女子、同志社女子、奈良女子高等師範に推薦で入れる成績であるにもかかわらず、なぜ日本女子大学の英文にこだわって試験を受けに行くのかと淑明の教師から聞かれたという。当時は入学試験を課す学校は珍しかったと思われる。日本女子大学の場合も英文学部以外は推薦で入学が決まったという<sup>2</sup>。英文学部は「推薦成績90点以上、4番以内<sup>3</sup>」で一次合格となり、さらに前述の試験を受けなければならなかった。日本女子大学の資料を見ると、「本

校の入学制度については、詳細に調査した記録はなく、いつから入学試験を実施したかは、不明である。入学希望者数などによって変動もあったと推定される<sup>4</sup>」とあって事実を確認することができないが、朴花城の詳細な記述から鑑みて、この内容と大きな違いはなかったと推測される。

この年、外国人の受験者は朴花城を含めて7名(台湾1、中国1、韓国5)で、英文学部には朴花城のみが合格し、朝鮮人初の合格者となった。ともに入学した朝鮮人は師範家政学部2名、家政学部1名であった。当時、日本女子大学には朝鮮人学生が6、7名在籍し、そのうち3名が淑明の卒業生だったという。

なお朴花城は、自らの入学と入れ違いに、朝鮮人留学生の朴順天と黄信徳が同校の社会事業学部を卒業したことも記している。

## 2 留学生活の始まり

### (1) 1年1学期

朴花城の入学当時、英文学部は80名入学したとしても卒業までは20名ほどしか残らないと言われるほど厳しかったという<sup>5</sup>。学生の多くが外交官夫人や華やかな将来を夢見る秀才たちで、生活水準は中流以上で派手だったという。また専門学校で英語を専攻して女学校の英語教師の資格を持っている者、2、3年英語を独習してから入学した者がほとんどで、新卒の場合も英語がトップクラスの女学校を出ていた。それだけに英文学部の授業はレベルが高かったのか、予習に多くの時間を必要としたため授業は午前だけだったという。

朴花城は朝8時までに登校して販売部でパンを2個買って朝食とし、授業が終わると1時半に帰宅して食事を作って食べ、その後4時からずっと何も食べずに明け方まで勉強した。外出らしい外出もせず、留学生同士の交流もなかった。夏休みに帰郷したさいに乱視と近視の眼鏡を作ってかけるようになった。それでも1年の成績がAマイナスだったため、悔しくて泣いたという。

### (2) 下宿

初めは日本女子大学の裏門近くの2階家に朝

鮮人の友人と部屋を借りて自炊したとしている。2年になってもその友人と同じ下宿に住んだが、朴花城は「家主の下宿生<sup>6</sup>」となり、友人は別の友人とともに隣の部屋に住んだという。「家主の下宿生」がどのような形態を指すのかは不明である。また最初は保証人の清家氏の家とも近かったので勉強を助けてもらったとも書いている。以上の書き方からすると朴花城は2年になったときに別の下宿に移ったようにも読めるが、その記述はない。これらに関してはⅢ章で再び述べる。

### 3 2年進級(1927-1928年)

#### (1) 2年1学期

2年進級を控えた春、早稲田大学英文学部を卒業して帰国する直前の梁柱東が突然、下宿を訪ねてきた。梁柱東は「英会話の守屋女史<sup>7</sup>」から朴花城のことを聞き、李殷相に尋ねて初めて作家、朴花城を知ったということである。すでに登壇はしたものの、朴花城はまだ文学者の間にも名前が知られていなかったようである。

兄が服役中の朴花城は兄の友人のP氏や、自分の友人の親戚から学費の援助を受けて学業を続けた。下宿の部屋には英文学の本、科学書の類、婦人問題に関する本が積まれている。このころ、ジョン・キーツについての論文を書くのに苦労したという<sup>8</sup>。またしても守屋女史に聞いたと言って訪ねてきた、早稲田の英文学部2年に在学中の鄭寅燮に論文を手伝ってもらった。鄭寅燮は既に日本で『オンドル夜話』という本を出していた。

3人の文学者を朴花城に引き合せた守屋女史なる人物が誰なのか、受験前に指導を受けた教師と同一人物なのか、現在のところ不明である。

この頃、1932年に女性作家初の新聞連載小説として発表される『白花』の構想を始めている。

夏休みに帰郷したさい、刑期を終えて出獄していた兄から友人を紹介された。

#### (2) 2年2、3学期

清家夫人の勧めで「読書会」に参加するようになった。参加者のほとんどは大学生で、指定された本を読んできて講師と熱烈な討論を繰り広げたという。また講演会で大々的に演題を掲

げ、隣席警官の注意も顧みずに政府の批判をする様子は、朝鮮では考えられないことだと感服した。

1927年5月に朝鮮で結成されていた女性による民族団体、樞友会の東京支会設立に向けての話が来た。樞友会東京支会は1928年1月に発足し、朴花城は支会の委員長に選出された<sup>9</sup>。そのため早速警察に連行され、一晩取り調べを受けたという。樞友会東京支会の事務所について、場所は忘れたが新幹会東京支会と同じ建物の1階にあったと書いている。

### 4 休学、帰国、結婚(1928年)

3年に進級したものの、すぐに帰国した。その理由について『私の交友録』では「色々な事情で<sup>10</sup>」と書いているが、自伝には「P氏との婚約を解消するため<sup>11</sup>」だったと書いている。そして樞友会東京支会の委員長も辞任した。P氏は朴花城の学費を援助するだけでなく、服役中の兄に代わって故郷の母の面倒を見てくれるなど、それまで朴花城兄妹を献身的に援助してきた人物で、自伝にも随筆にもP氏として登場する。P氏と朴花城は、朴花城の兄が服役していた光州刑務所にともに面会に行ったさい、旅館の空部屋が一つしかなく、仕方なく同じ部屋で一晩過ごしたことで自ずと婚約したような形になっていた。

故郷で『白花』の執筆を始めた。

ソウルに滞在していた6月24日、突然、金国鎮が訪ねてきてプロポーズされた。そして6月30日、家族にも告げずに結婚式を挙げた。金国鎮に関する記述は『私の交友録』にはなく、自伝でもこのとき初めて出てきている。おそらく1927年の夏休みに兄から紹介されたのが金国鎮ではないかと推測される。

### 5 東京で出産(1929年)

2月、妊娠6ヶ月となってお腹が目立つようになったため、友人の親戚から再び旅費と学費の援助を受けて東京へ行き、本郷の6畳間で生活を始めた。金国鎮は早稲田大学の政経学部に籍を置いていたという。そして5月1日に結婚披露宴を開くという内容の招待状を作り、故郷の家族や友人に送り、結婚の事実を知らせた。

5月27日、帝大付属病院で長女を出産した。金国鎮は夕刊配達のアルバイトをして学費と生活費を稼いだ。

## 6 復学、妊娠、帰国 (1930年)

1月、帰郷して長女を実家に預け、4月、日本女子大学の3年に復学した。兄から資金の援助を受けて下宿屋を始め、金国鎮の知り合い<sup>12</sup>ら4人の下宿生を置いたが、学業との両立が難しかったため1学期でやめた。金国鎮は夜店で商売をし、朴花城は兄の援助で学業を続けたが、勉強のみに集中することは難しかったという。そして再び妊娠して帰国した。これが完全な帰国となった<sup>13</sup>。

## 7 帰国後 (1931-1932年)

1931年3月31日、長男を出産した。金国鎮は個人商店の經理の仕事をしてながら、夜は仲間と部屋にこもって何かをしていたが、朴花城はそれが何かは全く知らず、自分は『白花』の修正をしていたという。

メーデー、国際無産青年デー、反戦デーに合わせてビラが撒かれ、兄が再び拘束されることが頻繁になった。9月28日、金国鎮が連行された。

1932年1月より金国鎮の3年間の服役が始まった。

6月から東亜日報で『白花』の連載が始まった。

以上、朴花城の東京留学前後の様子を自伝『吹雪の運河』と随筆『私の交友録』をもとに追った。次章では東京留学生を主人公とした長編小説を通して、さらに詳しい内容を見ていく。

## II 「北国の黎明」に見る東京留学生の生活

前章の初めに述べたように、朴花城の作品には自伝的な要素を含むものがいくつかある。長編『北国の黎明』（『朝鮮中央日報』1935年4月1日～12月4日）もその一つである。朴花城はこの作品の執筆動機について以下のように述べている。

大正十五年(1925年)年から昭和十年(1935年)までの十年間の当時の男女インテリ各層の思想的傾向と彼らの理想、煩悶等を多少なりとも描き出したいと思います。また進歩的な同志男女の性生活の一面と私生活の一面、東京における〇〇生活の一面等をごく僅かながらお見せして、当時の様子を十分の一でも想像していただけるようにするつもりです<sup>14</sup>。

舞台の設定から見て、この作品が朴花城自らの体験を土台に書かれたことは明らかである。主人公の成長過程から東京留学に至るまでのストーリーは先に見た自伝や随筆の内容とかなり類似している。ただし執筆動機に「男女インテリ各層の思想的傾向」、「東京における〇〇生活の一面」とあるように、この作品は主人公が東京留学を経て女性闘士として旅立つまでの、その思想的な成長に重きが置かれているため、特に後半部は朴花城の体験とは全く異なる展開を見せる。しかし前章で見たように朴花城は実際に東京留学時代に思想的な活動に参加しており、その体験が執筆活動に少なからぬ影響を与えたことは明らかである。帰国後間もなく、しかも日本の統治下で敢えてこのような内容の作品を発表したことが何よりの証拠である。本章では『北国の黎明』のストーリーには踏み込まないが、前章で見た朴花城の体験のうち、執筆活動の基礎となったと考えられる事柄がどのように書かれているのかを見ていく。

### 1 兄

『北国の黎明』の主人公ヒョソンの兄は東京の大学の政経科を卒業したが、「不良鮮人<sup>15</sup>」のレッテルのため就職ができず帰国した。そして前年の秋に仲間と組織した「M労働総同盟」が製油会社の同盟ストを煽動しているとの疑いがかけられて拘束された。それによりヒョソンの学費を出すことができなくなった。こうした内容は前章で見たことと同じであるが、ここでは「M労働総同盟」や「製油会社」などと具体的に書かれている。

### 2 保証人の妻と読書会

東京駅で朴花城を出迎えた保証人の妻、清家

としこは、『北国の黎明』では「清水さん」として登場し、やはり主人公を読書会に導く。

ヒヨスン<sup>16</sup>は2年の秋「社会科学の卒業クラス」にいる清水さんの紹介で社会科学研究会の会員になり、毎週日曜日の読書会に参加するようになる。この読書会以外にも、ヒヨスンは毎週土曜日の午後の下宿で朝鮮女性だけの読書会を開いている。講師は兄の友人のペク・サンヒョンで、この人物はのちに地下に潜伏し、活動の場を「北国」に移す。サンヒョンがヒヨスンの読書会に連れてきた女性たちは女学校の学生や普通学校卒業程度の学歴だったが、皆「××団体婦人部」の役員で、世界情勢や「××闘争」の方法、政策を論じることにかけては、実践の伴わないヒヨスンたちが敵う相手ではなかった。ヒヨスンはここで各団体の闘士と知り合いになり、彼らの会合には必ず出席するようになる。

### 3 下宿

『北国の黎明』では下宿の場所が「高田雑司が谷」と具体的に書かれている。さらに、鬼子母神を通して買い物に行き、南窓から見える鬼子母神の風景を好み、鬼子母神を背にして北窓から鬼子母神を眺める慶応の学生がいて、鬼子母神の方へ行くときに木の橋を渡る<sup>17</sup>、といった記述もある。これによりヒヨスンの生活圏を具体的に描くことができる。また、家主の息子が大工で、普段は家を空けていたことなども書かれている。

### 4 「××東京支会」

『北国の黎明』のヒヨスンは「××東京支会」を組織するための準備役員会を開く。そして最高幹部に任命され、創立大会を開催する。ヒヨスンは皆が帰省した大晦日も一人事務室に残り、「学校を退学して、ひたすら××のために生のすべてを捧げよう」と決心する。「××東京支会」の事務室は1階にあり、2階には「××総同盟」の事務室がある。そこではヒヨスンがのちに結婚するキム・ジュノが働いている。その晩、ジュノはヒヨスンの下宿を訪ね、ヒヨスンが婚約を解消したことを知る<sup>18</sup>。

ジュノはヒヨスンと同郷だが、話をするようになったのは「××東京支会」の最高幹部とな

ったヒヨスンを、早稲田大学の政治科に籍を置くジュノが突然訪ねてからである。ジュノはヒヨスンに好意を抱くが、ヒヨスンに婚約者がいることを気に病んでいた。結局、ヒヨスンは同志として選んだジュノと結婚する。

### 5 結婚

『北国の黎明』のヒヨスンが結婚するキム・ジュノは雄弁家で、上野の青年会館で開かれた「××総同盟」主催の講演会での演説をヒヨスンは記憶していた。作品では結婚の前後が省略され、ヒヨスンが1929年9月27日に長女を負って帰国する場面に飛ぶ。そのときジュノは日本で服役していた。ジュノは1930年10月に帰国すると、「××労働組合」の組織に奔走する。1931年、ヒヨスンは長男を出産するが、ジュノは捕まり、3年の判決を受ける。そして1932年5月からM刑務所での服役が始まる。その後、1934年にジュノは転向声明を出して仮出所する。ヒヨスンはそれに失望し、夫と子どもを残して「北国」へ旅立つ。

以上に見たように、朴花城自身の体験を土台に書かれた長編小説『北国の黎明』には、主人公の留学中の出来事が自伝や随筆よりも具体的に描かれている箇所があり、それらは朴花城の東京での体験を知る大きな手がかりとなる。次章ではこれまでに見てきた内容の事実関係を確認しながら、朴花城の東京留学時代についてより深く探る。

## III 朴花城の東京留学時代への接近

朴花城の執筆活動に兄からの思想的な影響があることはこれまでも言及されてきた。朴花城には兄が3人いたが、いちばん大きな影響を受けたのは3番目の兄、朴済民である。朴花城が7歳だった1910年、自国の皇帝の誕生日を祝う最後の祝賀行事で中学生の兄が堂々と演壇に上がって演説をし、会場が「皇帝陛下万歳」の声に包まれたときのことを、朴花城は「矜持と恥辱」を一度に経験したと回想している<sup>19</sup>。

『北国の黎明』に出てくる「M労働総同盟」とは「木浦労働総同盟」を指している。朝鮮で

は1924年頃から労働者の大衆闘争が強化されたのに伴い、労働者階級の連帯と労働団体間の連携が緊密となり、各地で労働運動系の団体を統合しようという要望が高まった<sup>20</sup>。1925年10月9日付『東亜日報』の記事によれば、木浦では10月13日の木浦労働総同盟設立会に向けて準備委員会が開かれている<sup>21</sup>。準備委員の中に朴済民の名前は見えないが、同11月20日付の「木浦木工組合」創立を伝える記事の中に「木浦労働総常務委員朴済民」と記されているのが確認できる<sup>22</sup>。そして木浦製油の労働争議に関する演説会で演説を行ったことも確認される<sup>23</sup>。さらに1926年3月24日付『朝鮮日報』の記事は、朴済民ら6人が木浦署に連行され、取り調べを受けたことを伝えている<sup>24</sup>。兄の服役により朴花城が学費を工面できなくなったことは先に見たとおりである。

もう一人、朴花城の執筆活動に影響を与えた人物と考えられてきた保証人の妻、「清家としこ」、「清水さん」とは清家とし氏（後に再婚して寺尾姓となる）であることが日本女子大学の資料によって確認される<sup>25</sup>。

清家としは朴花城が留学した1926年当時は日本女子大学社会事業学部女工保全科4年に在学し、夫の清家敏住は早稲田大学政経学部を出て報知新聞社に勤めていた。夫妻とも活動家で、としは大学卒業後、労働農民党の書記を経て、1928年11月に共産党に入党した。数度にわたる拘束、拷問にも耐え、そのがむしゃらな性格から「清家のオバサン」と呼ばれていたという。清家敏住は新聞社を3年ほどで辞めて実践活動に入ったが拷問に耐えられずに転向し、故郷でサラリーマンとなった。としは失望し、離婚した<sup>26</sup>。

清家敏住と朴花城の兄が大学の友人同士であったことはおそらく事実と思われる。しかも保証人を引き受けるほど親しい仲であったことが推測されるが、具体的な関係は現在のところ不明である。

朴花城が入学するのと入れ違いに日本女子大学社会事業学部女工保全科を3人の朝鮮人留学生が卒業した。黄信徳、朴順天、李賢卿であり、清家としの1年先輩にあたる<sup>27</sup>。黄信徳と朴順天は3・1独立運動に関与して入学当初より警

察にマークされており、李賢卿も黄信徳らと無産階級の解放と女性解放を掲げる在日の思想団体「三月会」（1925年3月～1926年12月）を組織していた。清家としはこの3人を1925年頃、夫の友人の金永植なる人物から紹介されたとしている。同じ学科であったにもかかわらず、3人が着物を着て日本人のように振舞っていたためそれまで知り合えなかったのだという。当時、金永植は頻繁に清家の家を訪れていたようである<sup>28</sup>。この金永植とは誰なのか。漢字は異なるが、ハングル表記と発音が同じ、キム・ヨンシク（金泳植）という人物が、1926年12月6日に東京で開かれた朝鮮共産党大会で中央執行委員の候補に挙がっている<sup>29</sup>。また、朴済民が関与した木浦製油争議においても金泳植は取り調べを受けている<sup>30</sup>。珍しくない名前ではあるが、同一人物であれば朴済民と清家敏住のつながりが少し見えてくる。

清家としは1927年3月に日本女子大学を卒業しているので、『北国の黎明』で「卒業クラス」とされているのとは食い違いが、卒業前後のとしの活動を見てみると、黄信徳ら3人の朝鮮人女性と知り合ってから、大学近くの朴順天の家に集まって「赤友会」と称して研究会を行っていた。この研究会は1926年3月の3人の卒業によって消滅するが、同級生の西村桜東洋と学習を続けた。そして先輩格の東京女子大学の社会科学研究会と交流して指導を受けた。4年になってからは週に1回、社会事業学部の学生からなるメンバーが家に集まり、小川治雄の指導で『空想から科学へ』、『共産党宣言』、『国家と革命』などをテキストに研究会を行なった。また、卒業後はとしの家に週1回、共に卒業した5人が集まり、講師の指導の下で福本イズムの研究会を行なったともいう<sup>31</sup>。

朴花城はおそらく、清家としと一緒にいくつかの会に参加したものと思われる。そして『北国の黎明』に書かれているように、2年になってから下宿で読書会を開いたのだとすれば、友人と別の部屋に住むようになったのはそのためだったとの推測も可能である。

朴花城の下宿の住所は日本女子大学の記録によれば「府下高田町雑司が谷597番地<sup>32</sup>」である。現在の番地では豊島区南池袋3丁目、鬼

子母神の位置する雑司が谷3丁目と隣接する。日本女子大学の裏門からは徒歩10分程度の距離である。ここが随筆に書かれている「学校の裏門近くの2階家」なのか、2年になって引っ越した先なのかわからない。なお、朴花城が入学した当時は清家としも「学校のそばの2階家」に住み、「鐘が鳴ってから家を出ても間に合った<sup>33)</sup>」としている。いずれにしても勉強を助けてもらえるほど近い距離であることには変わりがない。

当時の高田町には在日団体の事務所が数多く存在し、大会や演説会が催されることもあった。黄信徳らが結成した三月会の事務所は「高田町雑司が谷亀原10番地<sup>34)</sup>」に置かれていたが、これは日本女子大学の裏門のすぐ近くである。このとき黄信徳は最も規律が厳しいと言われた玉成寮に入っていた<sup>35)</sup>。清家としは、黄信徳は寮に入っていたので行動は慎重を要したとしている<sup>36)</sup>。黄信徳自身は2年になってからは朴順天と別れて寄宿舎に入り、運動から手を引いたと言うが<sup>37)</sup>、山川菊栄は1923年の初夏に朴順天と黄信徳の訪問を受け、会合への出席を求められたとしている<sup>38)</sup>。寮に入ったのはカムフラージュだった可能性もある。また、在日本朝鮮労働総同盟(1925年2月結成)は初め「高田町大字雑司が谷429番地<sup>39)</sup>」にあり、本部が戸塚町に移転してからは「高田町高田447番地」に西部支部が置かれた。ここには傘下の東京朝鮮労働組合(1925年6月結成)の西部支部も同居しており<sup>40)</sup>、実際に地区内の工場の労働争議を指導したことが確認される<sup>41)</sup>。

『北国の黎明』で「××東京支会」とされているのが権友会東京支会を指していることは間違いない。『北国の黎明』の発表は1935年であるから、伏字になっているのは検閲を考慮したものと思われる。「××総同盟」は在日本朝鮮労働総同盟とも思えるが、朴花城の記述通りならば新幹会ということになる。権友会東京支会が設立された頃、在日本朝鮮労働総同盟は「戸塚町源兵衛144番地<sup>42)</sup>」にあり、新幹会は「戸塚町諏訪199番地<sup>43)</sup>」にあった。この辺りも在日団体の事務所が数多く置かれ、会員は重複していたという<sup>44)</sup>。

1927年5月に朝鮮で権友会が結成された当時

の中心人物は黄信徳である。朴花城は1928年1月の東京支会設立時に委員長を務めたが、同年4月22日の東京支会第2回定期大会の時の役員改選で、職を下りたと見られる<sup>45)</sup>。先に見たように休学して帰国したためと思われる。気になるのは朴花城と黄信徳の接点である。

朴花城は『私の交友録』の中に「教育者、黄信徳」という小題を設け、1940年に学校を設立した黄信徳のことを書いている。さらに1957年から1958年にかけては黄信徳をモデルにした小説『崖に咲く花』を新聞連載した。しかし朴花城の東京留学時代に二人がどのような間柄であったのかはよくわからない。『北国の黎明』では黄信徳に該当する人物は特定できず、「教育者、黄信徳」には、大学では入れ違いだったため知り合えず、2年後に滞在中のソウルの下宿で会ったのが最初だったと書かれている。2年後というのが1928年だとすると、6月にやはりソウルの下宿で金国鎮からプロポーズを受けたのと同時期とも考えられる。この頃、権友会本部は全国大会の開催をめぐる東京支会と対立していた<sup>46)</sup>。金国鎮はその頃はまだ東京へ渡っていなかったが、新幹会の会員であった<sup>47)</sup>。大胆な推論ではあるが、3人は何らかの話し合いをするためにソウルに集まったのかもしれない。だとすれば朴花城は権友会から完全に手を引いたのではなかったということになる。

最後に自伝『吹雪の運河』と『北国の黎明』との違いに言及すると、最も大きな違いは結婚と離婚をめぐる顛末である。自伝によれば金国鎮は出獄後、龍井で中学の教師を勤めながら活動を続け、妻子よりも同志を選んだ。そして離婚に至る。その後、朴花城は1938年に千篤根氏と再婚する。千篤根は実業家であるが、蔵前工業専門学校(現東京工業大学)に留学中は新幹会東京支会に出入りしていた。自伝によれば、千篤根は新幹会と同じ建物の1階にあった権友会で初めて朴花城を見たという。新幹会東京支会第2回大会を報道した『東亜日報』1927年12月30日付の記事には、財務部の役員に千篤根の名前が見える。すると『北国の黎明』において1927年の大晦日にヒヨソンを訪ねたジュノのモデルは、千篤根である可能性もある。ジュノの転向と、それに失望したヒヨソンの北国への旅

立ちは完全な創作であるが<sup>48</sup>、金国鎮が龍井に発ち、千篤根と再会した時期に連載された『北国の黎明』に、東京での千篤根との出会いの場面を意識的に挿入したのだとすれば、そのことの持つ意味も朴花城の東京体験として考慮すべきであろう。

以上、朴花城の自伝『吹雪の運河』と随筆『私の交友録』、長編小説『北国の黎明』を手がかりに朴花城の東京留学時代の足跡を追った。その中で朴花城の思想形成に大きな影響を与えたことが指摘されてきた兄、朴済民の具体的な活動内容、清家としに勧められて参加するようになった読書会の様子がかかなり明確になった。さらに朴花城自らも下宿で読書会を開いていた可能性が浮かび上がり、その下宿があった高田町の雰囲気についても示唆を得ることができた。

一方、女性活動家である黄信徳とのつながりを含め、朴花城が権友会にどの程度関わっていたのかについてはさらなる調査が必要である。また、朴済民と清家夫妻との関係、夫の金国鎮の日本での足跡などについても同様である。

## おわりに

『北国の黎明』は朴花城の体験を土台に、東京留学生ヒョスンが女性闘士に成長するまでを描いた作品であるが、ヒョスンが日本人の級友と交流する場面が1箇所のみ描かれている。即興で詩を詠んだヒョスンに、小山という級友が「銅や鉄みたいに硬くて冷たく見えたハクさんの口から銀糸のようなカナリアの歌が出てくるとはね<sup>49</sup>」と驚く場面である。これはそれまで級友との深い交流がなかったことを表しているが、ヒョスンが当初の目的どおり文学を志す学生であったことをもうかがわせる。

朴花城が東京に留学した1926年、全国に3,375名の朝鮮人留学生在存在し、その70%、2,366名が東京に居住していた。このうち3分の2は中等学校以下の諸学校に通う者だったというが<sup>50</sup>、それにしても数多い朝鮮人留学生はそれぞれどのような生活を送っていたのであろうか。朴花城の東京での生活をより深く知るためには、さらに広い範囲から眺めてみる必要があると思われる。

## 注)

- 1 本研究は、文部科学省の科学研究費補助（基盤研究（B）「植民地期朝鮮文学者の日本体験に関する総合的研究」、代表、県立新潟女子短期大学波田野節子）を受けている。
- 2 英文学部以外は女学校の成績で入学が決まり、家族に卒業生がいる場合は優先的に入学させた（寺尾とし『伝説の時代』、未来社、1960年、p.43）。英語の試験で落ちて他科に入ることができた（朴花城『北国の黎明』、『朴花城文学全集』第2巻、プルン思想社、ソウル、2004年、p.298）。以下、『北国の黎明』と『吹雪の運河』（同、第14巻）からの引用は全て同全集に拠り、ページ数のみ記載する。
- 3 「90点以上」というのは女学校4年間の成績の平均であると思われる（『北国の黎明』、p.298）。師範家政科の場合は「80点以上」であったという（『吹雪の運河』、p.134）。「4番以内」（『吹雪の運河』、p.134）については「4分の1以内」（『北国の黎明』、p.298）ともあってはっきりしない。
- 4 『日本女子大学学園事典』、日本女子大学、2001年、p.246。
- 5 朴花城の同期生は40名が卒業している。入学者数は不明だが、80名とすれば半数が卒業まで残ったことになる（上掲書、p.362）。
- 6 朴花城『私の交友録』、『私の生と文学の余録』、ハルラ文化、木浦、2005年、p.229。
- 7 同上、p.231。
- 8 朴花城の在学時、島田重祐教授がキーツの詩を講義していた（『日本女子大学英文学科七十年史』、日本女子大学英文学科七十年史編集委員会、1976年、p.165）。
- 9 『東亜日報』（1928年2月1日付）に掲載された権友会東京支会設立大会の記事に委員長として朴花城の名前が記されている。
- 10 朴花城『私の交友録』（前掲）、p.243。
- 11 朴花城『吹雪の運河』、p.152。
- 12 金国鎮の親友の婚約者「朴嬢」で、のちにこの親友と朴嬢を通じて金国鎮の名前が割れ、金国鎮の逮捕につながったという（『吹雪の運河』、p.168、172）。
- 13 日本女子大学図書館を通じて入手した学籍情報によれば、正式な退学は1931年4月7日付になっている（資料提供、韓国草堂大学校副総長、徐正子



- 氏)。
- 14 朴花城「進歩層の理想と苦悶を」、『三千里』1935年11月号、p.72。
- 15 朴花城『北国の黎明』、p.111。
- 16 同上、p.340。
- 17 当時は朴花城の下宿が位置した場所と鬼子母神との間に川が流れていたという。このことを含め、朴花城の下宿の場所の特定に関しては豊島区立郷土資料館学芸員、福岡直子氏より多くの助言をいただいた。
- 18 『北国の黎明』には自伝と随筆に出てくる「P氏」に該当する人物として「チェ・ジン」が登場する。
- 19 朴花城「1910年の矜持と恥辱の私の生涯の始まりは…」、『月刊朝鮮』1980年11月号、pp.331～334。
- 20 金仁徳『植民地時代在日朝鮮人運動研究』、国学資料院、ソウル、1996年、p.75。
- 21 『木浦近現代新聞資料集成(上)』、木浦文化院、木浦、2002年、p.319。
- 22 同上、p.323。
- 23 同上、p.353。
- 24 同上、p.355。
- 25 『めじろ路 - 日本女子大学社会事業学部卒業生のあゆみ』、日本女子大学社会福祉学科の会みどりの会、1978年、p.36。
- 26 以上、寺尾とし『伝説の時代』(前掲) 参照。
- 27 『めじろ路 - 日本女子大学社会事業学部卒業生のあゆみ』(前掲)、p.21。
- 28 寺尾とし、前掲書、p.49。
- 29 金仁徳、前掲書、p.108。
- 30 『朝鮮日報』1926年3月23日付記事(『木浦近現代新聞資料集成(上)』、前掲、p.355)。
- 31 寺尾とし、前掲書、pp.50～68。
- 32 注13と同一の情報による。
- 33 寺尾とし、前掲書、p.56。
- 34 金仁徳、前掲書、p.61。
- 35 山川菊栄「私の会ったアジアの女性たち」、『おんな二代の記』、東洋文庫、1987年、p.320。
- 36 寺尾とし、前掲書、p.50。
- 37 黄信徳「人生歷程」、『黄信徳先生遺稿集、倒れることのない家を』、秋溪黄信徳先生記念事業会、ソウル、1984年、p.360。
- 38 山川菊栄、前掲書、p.315。
- 39 金仁徳、前掲書、p.77。
- 40 同上、p.128。
- 41 『豊島区史 通史編二』、豊島区史編纂委員会、1983年、p.619。
- 42 朴尚僊「東京朝鮮人諸団体歴訪記」、『朝鮮思想通信』1927年11月29日。
- 43 同上、1927年11月27日。
- 44 同上。
- 45 李順愛「在日朝鮮女性運動(上) - 権友会を中心として -」、『在日朝鮮人研究』第三号、1978年、p.25。
- 46 李順愛「在日朝鮮女性運動(下) - 権友会を中心として -」、『在日朝鮮人研究』第四号、1979年、p.30。
- 47 歴史問題研究所(編)『日帝下社会運動人名索引集(上)』(ヨガン出版社、ソウル、1992年、p.184) 参照。
- 48 筆者は『北国の黎明』の主人公ヒョスンのモデルが清家としてである可能性について述べた(拙稿「朴花城の長篇『北国の黎明』について」、『県立新潟女子短期大学研究紀要』第44集、2007年)。
- 49 朴花城『北国の黎明』、p.420。ヒョスンの姓は「白」である。
- 50 内務省警保局保安課「大正十五年中ニ於ケル在留朝鮮人ノ状況」、朴慶植(編)『在日朝鮮人関係資料集成』第一巻、三一書房、1975年、p.204。